

【学会大会第 25 回大会】

この度の令和六年能登半島地震で亡くなられた方々に深く哀悼の意を表し、被災された多くの皆様にこころよりお見舞い申しあげます。また支援に当たられている関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。そして被害が今以上に拡がらないことを祈念いたします。

昨年 11 月に東邦大学（千葉県）にて学会大会の第 25 回大会がオンサイト・オンラインのハイブリッド方式で開催されました。オンラインの併用は、その設営や当日の会場運営などで大変なことも多いですが、遠方からも参加していただけるという利点は大きいです。

2 つの事例研究発表、3 つの一般研究発表、ワークショップ、講演会、シンポジウムが開催されました。1 日目には懇親会も開かれ、山中先生にもご来場いただき盛会となりました。徐々に、コロナ前の大会へと戻りつつあるかとも思いますが、コロナ禍を経たからこそ、本学会のあり方や大会に参加しての思いが新たになったのではないのでしょうか。

今号では、開催にご尽力いただいた大会実行委員長、および発表者、参加者の皆様からコメントを頂きました。振り返りつつ、次年度宮崎大学で開かれる第 26 回大会に向けて、また思いを新たにしていきましょう。

第 25 回大会を振り返って

澁川賢一（東邦大学）

昨年 11 月 25 日・26 日に、日本臨床心理身体運動学会第 25 回大会を東邦大学習志野キャンパスにて開催させていただきました。多くの先生方にご参加をいただき、誠に有難うございました。本学会大会では、「共鳴する身体」というテーマの中で、研究発表、対面での懇親会、6 つのワークショップ、一般公開シンポジウム（テーマ：器としての身体）を開催いたしました。大会当日は至らぬ点多かったと反省をしておりますが、ご参加いただいた皆様に喜んでいただけましたら幸いです。

大会実行委員長としての 1 年余りの期間は、とても濃密な時間でした。準備段階においては、実行委員会の立ち上げに始まり、大会テーマの決定、学内施設利用の申請手続き、大会プログラムの立案、登壇者への依頼交渉、広告協賛・後援依頼、ポスター作成、ホームページ開設、大会プログラムの作成、参加者や大会予算の管理、会場運営といった様々な作業が、常に目の前にありました。膨大な作業と締め切りに押しつぶされそうになりましたが、今思えば、毎日向き合った一つ一つの作業を通して、心理臨床家としての自分自身が問われ、鍛えられていったようにも感じています。特に相手への配慮、時間・場所・料金といった基本的な枠組みの設定（とその意味）、決断と覚悟に関しては、大いに考えさせられました。私にとって 2 番手が居心地の良い位置でしたが、1 番手の責任感や風圧を味わうことが出来たのは有難い体験でした。実行委員の中島郁子先生、齊藤茂先生、山本幸代先生、前

田章先生、野澤珠美先生、学会事務局の三宅様には準備段階から当日まで、多大なるご支援・ご協力をいただきました。また、当日の会場運営には多くの先生方や東邦大学関係者にもお手伝いをいただきました。この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

私の想いが詰まった一般公開シンポジウムでは、話題提供者の妻木充法先生のご講演や実演は大変刺激的でした。体育やスポーツを生業としている私にとって、心と身体のつながりは理解していたつもりでしたが、想像を超えて身体が（自他に）情報を出入力していることを痛感しました。身体が他者と共鳴し増幅器として機能することの可能性を感じたとともに、身体のことをわかったつもりになってはならないと自戒しました。また、アプローチの仕方が身体であれ心であれ、その人そのものをどのように感じて向き合うことができるか、相対するこちら側の態度や姿勢が問われることは同じなのだろうとも感じました。

未だ学会大会の余韻が残り、消化吸收していくにはしばらく時間がかかりそうです。ただただ慌ただしく動き回っていただけで何も得られていないのかもしれないかもしれません。少なからず身体に刻み込まれた体験の記憶を大切にしながら、今後の臨床活動に丁寧に向き合っていきたいと思います。この経験をいつの日か日本臨床心理身体運動学会の活動にも還元できるよう、日々精進していきたいと思います。次回大会以降も、学会大会が盛会となりますことを心より祈念しております。

日本臨床心理身体運動学会での事例研究発表を行って

篠田亜美（早稲田大学保健センター）

2023 年 11 月に千葉県で行われた第 25 回大会にて事例研究発表をさせていただきました。

発表した事例は、何年か前に終結したものの、「もっとできたことがあったのでは」、「これでよかったのだろうか」と思うところがあり、一度きちんと振り返りたいと感じていた事例でした。これまで何度か講習会等で本学会の事例検討の場に参加させていただいた際に、この学会の場の懐の深さのようなものを感じ、この事例を発表するならばここで発表させていただこうという気持ちで、発表者にエントリーしました。本学会には前回の第 24 回大会前に入会し、大会参加自体も 2 回目、発表は初めてのことで、まだまだ新参者の心持ちながら、ゆったりと臨むことができたのも、この学会の懐の深さ故と感じます。

当日は、指定討論の労をお取りいただいた高橋幸治先生、名取琢自先生をはじめ、フロアの先生方からも本当にたくさんのコメントをいただくことができ、それらのコメントが響きあって、一つのリズムのようなものが生まれていくライブ感を肌で感じることができました。そして、発表前に感じていた「もっとできたことがあったのでは」「これでよかったのだろうか」という漠とした感覚が、「こういうことが起こっていたのかな」「ここをもう少し考えられたらよかった」と細分化して自分の中にすっと納まっていきました。

私はいつも、事例を少し大きな場で発表するとき、うまく表現できないのですが、自分が見守ってきたクライアントが、自分以外のたくさんの臨床家の見守りの中に包まれるような感覚を持ちます。もちろん、経過の最中にも、クライアントと関わる多くの人の見守りがあり、自分自身も現場の同僚や構造的な守りに支えてもらいながら、経過が進んでいくのだと思いますが、終結後に一段抽象化した形で多くの臨床家の先生たちにクライアントの存在が共有されるということに、どこか温かさを感じます。今回の発表では、その温かさがより強く感じられたように思います。

個人的には、長らく過ごした関西を離れて、関東に移ったばかりのタイミングでしたので、生活も仕事も一から基盤を作り直さねばならず、落ち着かない日々の中での発表でしたが、これから気を引き締めて、自分らしくやっていこうという元気をももらえたように感じます。改めて、このような機会をいただけたことに深く感謝申し上げます。

一般研究発表を経験して

内田 晋子（平安女学院大学）

日本臨床心理身体運動学会第25回学会大会にて一般研究発表をさせていただきました。発表では、わらべうたを中心とした親子の子育て支援講座についての実践発表をしましたが、今回の発表は日本臨床心理身体運動学会でなければできなかったのではないかと思います。子育て支援講座で行った歌や遊びの実践をしながら、フロアの先生方に追体験をしていただきたいと事前に考え、準備をしました。考えていたよりも時間がかかりましたが、1時間30分という発表時間のお陰で焦らずに発表ができました。また、フロアの先生方が一緒に参加してくださっているような感覚があり、当時の様子を私自身が思い出したりイメージしたりしながら、発表を進められました。忘れていたことが思い出され、発表して良かったなとしみじみ感じています。そして、発表に対してたくさんのコメントをいただいたお陰で、実践について多様な視点で考えることができました。私自身が楽しめる実践であったと振り返って感じる事ができたと同時に、たくさんの親子と一緒に同じ場を共有することが大切であったと気づくことができました。親子の身体に関わることや“祭り”との共通点など考察の視点もいただき、新しい視点をもって実践を見ていけるように思います。コロナ禍や私自身の事情もあって現在中断をしている子育て支援講座でしたが、もう一度できる環境が整えば続けたいと想いを強くしています。

最後になりましたが、学会大会の運営をしてくださった先生方や指定討論者の仁里文美先生、座長の中島郁子先生、発表にコメントを頂いた先生方、フロアやオンラインで参加してくださった先生方、お声がけくださった中島登代子先生にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。学会等に対面で参加させていただくことは数年ぶりでしたが、仁里先生や中島先生をはじめ、フロアやオンラインでご参加された先生方の作ってくださった雰囲気のお陰で安心して発表できました。本当にありがとうございます。

第25回大会に参加して

永野雅代（こごうメンタルクリニック）

昨年入会した新参加者です。初めて対面での学会大会に参加しました。昨年は、オンラインで参加したので、今回が初めての対面での参加でした。

オンラインの良さは、何と言ってもその利便性です。昨年は、オンラインによって自宅に居ながらにして参加することができました。大会に参加された皆さんの討論を聞きながら、時にはチャットで参加することもできます。しかしながら、今回は千葉県習志野市まで赴くことができ、大会の臨場感をたっぷり味わうことができました。これは、やはり生身で参加したからこその良さでしょう。オンラインでは、いつも顔を合わせていた皆さんとも対面では初めて会うことができました。お互いに「初めて会いましたか？」と、半信半疑の初対面。バーチャルがリアルに転じた瞬間を味わうこととなりました。

今回の一般公開シンポジウム「器としての身体」での妻木充法さんのパフォーマンスは、会場にいたからこそ、伝わってきた感があります。もはや、鍼灸師としては名人の域に達している方だからこその手技と感じました。名人の手技を味わえた壇上の先生方は幸運だったと思います。臨床心理の世界でも、どうしても名人とまではいかなくとも、精進していけるのか。妻木さんの「共同作業」という言葉に、ヒントの一端があるように感じたことでした。「ツボも、見つけられたがっている」「一番無力なところが、一番変化を受け入れる」というのも、臨床心理に通じるところがあるのではないのでしょうか。

ワークショップでは、中島登代子先生の「MSSMの魔法～もののけのトリセツ」に参加しました。コロナ禍前の中島先生のセミナーで、対面で1回経験し、その後はオンラインでのセミナーで講義を

受けました。実際に臨床場面で使ってみると、MSSM に助けられる場面が多く、その不思議さに魅入られる思いがします。当日は少人数で、まず2人組を作って実践。その後の講義を受けて、メンバーを入れ替えて実施しました。MSSM は、Th が自分なりに実践している側面も多く、私もその一人。ぐるぐる描きの線を、画用紙を回して見ながら、CI へのヒントのつもりで、あれこれと連想されるものを喋っていました。講義の中で、中島先生も浅田先生も「黙ってやる」と聞き、2回目の実践の光景が一変しました。皆、口には出さずとも、不安は不安のまま、黙ってやってみることに意義を感じたようです。

これこそ、対面での醍醐味を感じるワークショップとなりました。事例研究発表にも参加して、対面での各3時間、たっぷりと浸ることができました。

今回、会場となった東邦大学習志野キャンパスは、交通アクセスが良く、宮崎県から出向いた私でも、非常にわかりやすい場所にありました。大会実行委員長の澁川賢一先生はじめ、第25回大会に関わった全ての方々へ感謝です。次回の第26回大会は、宮崎県・宮崎大学で行われます。宮崎県での初開催、ぜひ、神話の故郷・宮崎へ足を運んでください。きっと、風土に根差した体験を楽しんでいたのではないかと思います。お待ちしております。

編集後記 1年が経つのはあっという間ですね。
1年1年と学会大会を重ねてくる中で、25年という時の流れを感じます。今大会でも山中先生が言われていたように、学会にしようと思う、と京都で言われて早四半世紀が経つことに驚かされます。その間に様々な出来事があるとともに、学会の歩みも感じることができるように思います。25周年記念号も必要ですね。原稿をお待ちしています。
(仁里)

SPACE No. 42
日本臨床心理身体運動学会 会報第 42 号
2024 年 2 月 10 日発行
日本臨床心理身体運動学会
会 長 山中康裕
編集責任 仁里文美
事務局 〒600-8449
京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1
株式会社 木立の文庫内
TEL : 075-585-5277
FAX : 075-320-3664
E-mail : office@rinsinsin.jp